

研究分野のキーワード：舞踊教育，表現，動き，発想，認識

研究紹介：

ダンスは、創作ダンス、ジャズ、ヒップホップ、フォークダンス、日本舞踊、歌舞伎・・・等、様々な種類やジャンルがあり、近年ダンスをする人の人口が増えてきました。学校で取り上げられているダンスの種目は「表現・創作ダンス」「フォークダンス」「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の3種類で、小学校では「表現運動」、中学校・高等学校では「ダンス」という領域名となっています。「フォークダンス」は決められた定型の踊りを覚えて踊るダンスであるのに対して、「表現・創作ダンス」と「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」はイメージやリズムを手がかりとして、自由に動きを創造するダンスです。平成20年の学習指導要領では中学校でダンスが必修化になり、男女ともにすべての生徒がダンスを経験する時代となりましたが、それと同時に現場の教員からは「どのように指導したらいいのかわからない」「どう動くことをねらいとしたらよいかかわからない」など、ダンスの授業に対する問題は多岐にわたっています。

ダンスの授業の中でも、私は小学校での表現の授業に着目し、児童から現れた「動き」に焦点を当てて研究を進めています。表現は「題材の特徴をとらえて、そのものになりきって全身で表現する」という特性があり、題材の模倣をし、そのものになりきることによって多様な動きを引き出します。表現における動きは、技を洗練していくようなものではなく、個別化し多様化すること、つまり動きの広がり重視しています。そのため、表現の動きは「違いがあるからおもしろい」(村田、2009)とされ、題材の特徴をとらえた「独創的な動き」を見つけ表現することが重要であります。しかし、色々な動きとはどのような動きか、また「独創的な動き」とはどのような動きか、明らかにされていません。そのため、「表現」で現れる動きを類型化し、「独創的な動き」とはどのような動きかを明らかにするための研究をしています。

現時点で明らかになったこととして、表現における「動き」には、題材からの発想が大きく関わっており、児童が題材のどのような特徴をとらえているかということが重要であることがわかりました。例えば「ゾウ」という題材を表現する際に、発想が「鼻が長い」ということだけであれば片手をただぶらぶらする動きしか現れませんが、発想が「長い鼻をぶらぶら動かし、ドスドス歩く」や「水浴びをしている、餌を食べている」などの発想をしている児童は、動きも多様化し、独創的な動きをする傾向にありました。つまり、発想と動きは深く関係しており、想像する力、発想する力が動きの多様性や独創性に繋がっていることがわかりました。また、豊かな発想力を得るためには、これまでの経験や認識が影響しており、児童がものを捉える際に、何を感じてどのようにそのものを記憶したのかが重要であることが明らかになりました。今後は、独創的な動きを引き出すための指導法を考えていく予定です。